

春

芥川龍之介

青空文庫

ある花曇りの朝だった。広子は京都の停車場から東京の急行列車に乗った。それは結婚後二年ぶりに母親の機嫌を伺うためもあれば、母かたの祖父の金婚式へ顔をつらねるためもあった。しかしまだそのほかにもまんざら用のない体ではなかった。彼女はちょうどこの機会に、妹の辰子の恋愛問題にも解決をつけたいと思っていた。妹の希望をかなえるにしろ、あるいはまたかなえないにしろ、とにかくある解決だけはつけなければならぬと思っていた。

この問題を広子の知ったのは四五日前に受け取った辰子の手紙を読んだ時だった。広子は年ごろの妹に恋愛問題の起ったことは格別意外にも思わなかった。予期したと言うほどではなかったにしろ、当然とは確かに思っていた。けれどもその恋愛の相手に篤介を選んだと言うことだけは意外に思わずにはいらなかった。広子は汽車に揺られてる今でも、篤介のことを考えると、何か急に妹との間に谷あいの出来たことを感ずるのだった。

篤介は広子にも顔馴染みのあるある洋画研究所の生徒だった。処女時代の彼女は妹と

一しよに、この画の具だらけの青年をひそかに「猿」と譚名していた。彼は實際顔の赤い、妙に目ばかり赫かさせた、——つまり猿じみた青年だった。のみならず身なりも貧しかった。彼は冬も金釦の制服に古いレエン・コオトをひっかけていた。広子は勿論篤介に何の興味も感じなかった。辰子も——辰子は姉に比べると、一層彼を好まぬらしかった。あるいはむしろ積極的に憎んでいたとも云われるほどだった。一度なども辰子は電車に乗ると、篤介の隣りに坐ることになった。それだけでも彼女には愉快ではなかった。そこへまた彼は膝の上の新聞紙包みを拵げると、せつせとパンを嚙じり出した。電車の中の人々の目は云い合せたように篤介へ向った。彼女は彼女自身の上にも残酷にその目の注がれるのを感じた。しかし彼は目じろぎもせず悠々とパンを食いつづけるのだった。……

「野蠻人よ、あの人は。」

広子はこのことのある後、こう辰子の罵つたのをいまさらのように思い出した。なぜその篤介を愛するようになったか？——それは広子には不可解だった。けれども妹の氣質を思えば、一旦篤介を愛し出したが最後、どのくらい情熱に燃えているかはたいがい想像出来るような気がした。辰子は物故した父のように、何ごとにも一図になる氣質だった。たとえば油画を始めた時にも、彼女の夢中になりさ加減は家族中の予想を超越して

いた。彼女は華奢な画の具箱を小脇に、篤介と同じ研究所へ毎日せつせと通い出した。同時にまた彼女の居間の壁には一週に必ず一枚ずつ新しい油画がかかり出した。油画は六号か八号のカンヴァスに人体ならば顔ばかりを、風景ならば西洋風の建物を描いたのが多いようだった。広子は結婚前の何箇月か、——殊に深い秋の夜などにはそう云う油画の並んだ部屋に何時間も妹と話しこんだ。辰子はいつも熱心にゴオグとかセザンヌとかの話をした。当時どこかに上演中だった武者小路氏の戯曲の話もした。広子も美術だの文芸だのに全然興味のない訣ではなかった。しかし彼女の空想は芸術とはほとんど縁のない未来の生活の上に休み勝ちだった。目はその間も額縁に入れた机の上の玉葱だの、繻帯をした少女の顔だの、芋畑の向うに連つた監獄の壁だのを眺めながら。……

「何と云うの、あなたの画の流儀は？」

広子はそんなことを尋ねたために辰子を怒らせたのを思い出した。もっとも妹に怒られることは必ずしも珍らしい出来事ではなかった。彼等は芸術の見かたは勿論、生活上の問題などにも意見の違うことはたびたびあった。現にある時は武者小路氏の戯曲さえ言い合の種になった。その戯曲は失明した兄のために犠牲的の結婚を敢てする妹のことを書いたものだった。広子はこの上演を見物した時から、（彼女はよくよく退屈しない限り、

小説や戯曲を読んだことはなかった。芸術家肌の兄を好まなかった。たとい失明して、たにしろ、按摩あんまにでも何なんにでもなれば好いいのに、妹の犠牲を受けているのは利己主義者であるとも極言した。辰子は姉とは反対に兄にも妹にも同情していた。姉の意見は嚴げん肅しゆくな悲劇をわざと喜劇に翻訳する世間人の遊戯であるなどとも言った。こう言う言い合いのつめた末には二人ともきつと怒り出した。けれどもさきに怒り出すのはいつも辰子にきまつていた。広子はそのに彼女自身の優越ゆうえつを感じずにはいられなかった。それは辰子よりも人間の心を看破かんぱしていると言う優越だった。あるいは辰子ほど空疎な理想に捉とらわれていないと言う優越だった。

「姉さん。どうか今夜だけはほんとうの姉さんになって下さい。聡明そうめいないつもの姉さんではなしに。」

三度目に広子の思い出したのは妹の手紙の一行いちぎょうだった。その手紙は不相あいかわらず変白い紙を細かいペンの字に埋うづめていた。しかし篤介との関係になると、ほとんど何ごととも書いてなかった。ただ念入りに繰り返してあるのは彼等は互に愛し合っていると云う、簡単な事実ばかりだった。広子は勿論ぎよう行の間に彼等の関係を讀もうとした。実際またそう思つて讀んで行けば、疑わしい個所もないではなかった。けれども再さい応おう考えて見ると、それも皆

彼女の邪推じやすいらしかった。広子は今もとりとめのない苛立いらだたしきを感じながら、もう一度何か憂鬱ゆううつな篤介の姿を思い浮べた。すると急に篤介の匂におい——篤介の体の発散する匂は干草くさに似ているような気がし出した。彼女の経験に誤りがなければ、干し草の匂のする男性はたいてい浅ましい動物的本能に富んでいるらしかった。広子はそう云う篤介と一しよに純粋な妹を考えるのは考えるのに堪えない心もちがした。

広子の聯想れんそうはそれからそれへと、とめどなしに流れつづけた。彼女は汽車の窓側まじぎわにきちりと膝ひざを重ねたまま、時どき窓の外へ目を移した。汽車は美濃みのの国境くにぎかいに近い近江おうみの山峡やまかいを走っていた。山峡には竹藪たけやぶや杉林の間に白じろと桜の咲いているのも見えた。「この辺へんは余ほど寒いと見える。」——広子はいつか嵐あらし山やまの桜も散り出したことなどを思い出していた。

二

広子ひろこは東京へ帰った後のち、何かと用ばかり多かつたために二三日の間は妹とも話をする機会きかいを捉とらえなかつた。それをやつと捉えたのは母かたの祖父の金婚式から帰つて来た夜よるの十

時ごろだった。妹の居間には例の通り壁と云う壁に油画がかかり、畳に据えた円卓の上にも黄色い笠をかけた電燈が二年前の光りを放っていた。広子は寝間着に着換えた上へ、羽織だけ紋のあるのをひっかけたまま、円卓の前の安楽椅子へ坐った。

「ただ今お茶をさし上げます。」

辰子は姉の向うに坐ると、わざと真面目にこんなことを言った。

「いえ、もうどうぞ。——ほんとうにお茶なんぞ入らないことよ。」

「じゃ紅茶でも入れましょうか？」

「紅茶も沢山。——それよりもあの話を聞かせて頂戴。」

広子は妹の顔を見ながら、出来るだけ気軽にこう言った。と言うのは彼女の感情を、——かなり複雑な陰影を帯びた好奇心だの非難だのあるいはまた同情だのを見透かされないためもあれば、被告じみた妹の心もちを楽にしてやりたいためもあったのだった。しかし辰子は思いのほか、困ったらしいけはいも見せなかった。いや、その時の彼女のそぶりに少しでも変化があったとすれば、それは浅黒い顔のどこかにほとんど目にも止らぬくらい、緊張した色が動いただけだった。

「ええ、ぜひわたしも姉さんに聞いて頂きたいの。」

広子は内心プロログの簡単にすんだことに満足した。けれども辰子はそう言つたぎり、しばらく口を開かなかつた。広子は妹の沈黙を話し悪いためと解釈した。しかし妹を促すことはちよつと残酷な心もちがした。同時にまたそう云う妹の羞恥を享樂したい心もちもした。かたがた広子は安樂椅子の背に西洋髪せいようがみの頭を寄せたまま、全然当面の問題とは縁のない詠嘆の言葉を落した。

「何だか昔に返つたような気がするわね、この椅子にこうやって坐つていると。」

広子は彼女自身の言葉に少女じみた感動を催しながら、うっとり部屋の中を眺めまわした。なるほど椅子も、電燈も、円卓も、壁の油画も昔の記憶の通りだった。が、何かその間に不思議な変化が起つていた。何か？——広子はたちまちこの変化を油画の上に発見した。机の上の玉葱たまねぎだの、繻帶ほうたいをした少女の顔だの、芋いも 畠ばたけの向うの監獄だのはいつの間にかどこかへ消え失せていた。あるいは消え失せてしまわないまでも、二年前には見られなかつた、柔かい明るさを呼吸していた。殊に広子は正しょう 面めんにある一枚の油画に珍らしさを感じた。それはどこかの庭を描いた六号ばかりの小品しょうひんだった。白茶しろちやけた苔こけに掩おおわれた木々と木末こすえに咲いた藤の花と木々の間に仄ほのめいた池と、——画面にはそのほか何もなかつた。しかしそこにはどの画よりもしつとりした明るさが漂ただよっていた。

「あなたの画、あそこにあるのも？」

辰子は後ろを振り向かず、姉の指した画を推察した。

「あの画？ あれは大村の。」

大村は篤介の苗字だった。広子は「大村の」に微笑を感じた。が、一瞬間羨ましさに似た何ものかを感じたのも事実だった。しかし辰子は無頓着に羽織の紐をいじりいじり、落ち着いた声に話しつづけた。

「田舎の家の庭を描いたのですって。——大村の家は旧家なんですって。」

「今は何をしているの？」

「県議員か何かでしょう。銀行や会社も持っているようよ。」

「あの人は次男か三男かなの？」

「長男——って云うのかしら？ 一人きりしかないんですって。」

広子はいつか彼等の話が当面の問題へはいり出した、——と言うよりもむしろその一部を解決していたのに気がついた。今度の事件を聞かされて以来、彼女の気がかりになっていたのはやはり篤介の身分だった。殊に貧しげな彼の身なりはこの世俗的な問題に一層の重みを加えていた。それを今彼等の問答は無造作に片づけてしまったのだった。ふとその

事実に氣のついた広子は急に常談じょうだんを言う寛くわんぎを感じた。

「じゃ立派りっぱな若旦那わかしらなね。」

「ええ、ただそりやボエムなの。下宿げしゆくも妙なところにいるのよ。羅紗屋らしやの倉庫そうこの二階を借りているの。」

辰子はほとんど狡猾こうかつそうにちらりと姉へ微笑を送った。広子はこの微笑の中に突然一人前ちじんまえの女を捉とらえた。もつともこれは東京駅へ出迎えた妹を見た時から、時々意識のぼへ上ることだった。けれどもまだ今のように、はつきり焦点の合ったことはなかった。広子はその意識と共にたちまち篤介との関係にも多少の疑惑を抱き出した。

「あなたもそこへ行つたことがあるの？」

「ええ、たびたび行つたことがあるわ。」

広子の聯想れんそうは結婚前のある夜の記憶を呼び起した。母はその夜風呂にはいりながら、彼女に日どりのきまつたことを話した。それから常談じょうだんとも真面目まじめともつかずに体の具合ぐあを尋ねたりした。生憎あいにくその夜の母のように淡白な態度に出られなかった彼女は、今もただじつと妹の顔を見守るよりほかに仕かたはなかった。しかし辰子は不あ相い変か落わち着ちいた微笑を浮べながら、眩まぶしそうに黄色い電燈の笠へ目をやっているばかりだった。

「そんなことをしてもかまわないの？」

「大村が？」

「いいえ、あなたがよ。誤解でもされたら、迷惑じゃなくって？」

「どうせ誤解はされ通しよ。何しろ研究所の連中と来たら、そりゃ口がうるさいんですもの。」

広子はちよつと苛立たしさを感じた。のみならず取り澄ました妹の態度も芝居ではないかと言う猜疑さえ生じた。すると辰子は弄んでいた羽織の紐を投げるようにするなり、突然こう言う問を發した。

「母さんは許して下さるでしょうか？」

広子はもう一度苛立たしさを感じた。それは恬然と切りこんで来る妹に対する苛立たしきでもあれば、だんだん受太刀になって来る彼女自身に対する苛立たしきでもあつた。彼女は篤介の油画へ浮かぬ目を遊ばせたまま「そうねえ」と煮え切らない返事をした。

「姉さんから話していただけない？」

辰子はやや甘えるように広子の視線を捉えようとした。

「わたしから話すつたつて、——わたしもあなたたちのことは知らないじゃないの？」

「だから聞いて頂戴ちようだいって言っているのよ。それをちつとも姉さんは聞く気になつてくれないんですもの。」

広子はこの話のはじまった時、辰子のしばらく沈黙したのを話し悪いにくためと解釈したが、今になって見ると、その沈黙は話し悪いよりも、むしろ話したさをこらえながら、姉の勧めるのを待つていたのだった。広子は勿論後ろめたい気がした。

しかしまた咄嗟とつさに妹の言葉を利用することも忘れなかった。

「あら、あなたこそ話さないんじゃないの？——じゃすっかり聞かせて頂戴。その上でわたしも考えて見るから。」

「そう？　じゃとにかく話して見るわ。その代りひやかしたり何かしちや厭いやよ。」

辰子はまともに姉の顔を見たまま、彼女の恋愛問題を話し出した。広子は小首こくびを傾けながら、時々返事をする代りに静かな点頭てんとうを送っていた。が、内心はこの間も絶えず二つの問題を解決しようとあせっていた。その一つは彼等の恋愛の何のために生じたかと言うことであり、もう一つは彼等の関係のどのくらい進んでいるかと言うことだった。しかし正直な妹の話もほとんど第一の問題には何の解決も与えなかった。辰子はただ篤介と毎日顔を合せているうちにいつか彼と懇意こんいになり、いつかまた彼を愛したのだった。のみなら

ず第二の問題もやはり判然とはわからなかった。辰子は他人の身の上のように彼の求婚した時のことを話した。しかもそれは抒情詩よりもむしろ喜劇に近いものだった。――

「大村は電話で求婚したの。可笑しいでしょう？ 何でも画に失敗して、畳の上どころがっていたら、急にそんな気になったんですって。だっていきなりどうだって言ったって、返事に困ってしまうじゃないの？ おまけにその時は電話室の外へ母さんも探しものに来ているんでしょう？ わたし、仕かたがなかったから、ただウイ、ウイって言って置いたの。……」

それから？――それから先も妹の話は軽快に事件を追って行った。彼等は一しよに展览会を見たり、植物園へ写生に行ったり、ある独逸のピアノリストを聴いたりしていた。が、彼等の関係は辰子の言葉を信用すれば、友だち以上に出ないものだった。広子はそれでも油断せずに妹の顔を窺ったり、話の裏を考えたり、一二度は鎌さえかけて見たりした。しかし辰子は電燈の光に落ち着いた瞳を澄ませたまま、少しも臆した色を見せないのだった。

「まあ、ざつとこう言う始末なの。――ああ、それから姉さんにわたしから手紙を上げたことね、あのことは大村にも話して置いたの。」

広子は妹の話し終った時、勿論齒痒いもの足らなさを感じた。けれども一通り打ち明
けられて見ると、これ以上第二の問題には深入り出来ないのに違いなかった。彼女はそ
のためにやむを得ず第一の問題に縋りついた。

「だってあなたはあの人は大嫌いだって言っていたじゃないの？」

広子はいつか声の中にはいった挑戦の調子を意識していた。が、辰子はこの間にさ
え笑顔を見せたばかりだった。

「大村もわたしは大嫌いだったんですって。ジン・コクテルくらいは飲みそうな気がし
たんですって。」

「そんなものを飲む人がいるの？」

「そりやいるわ。男のように胡坐をかいて花を引く人もいるんですもの。」

「それがあなたがたの新時代？」

「かも知れないと思っっているの。……」

辰子は姉の予想したよりも遥かに真面目に返事をした。と思うとたちまち微笑と一し
よにもう一度話頭を引き戻した。

「それよりもわたしの問題だわね、姉さんから話していただけない？」

「そりや話して上げないこともないわ。上げないこともないけれども、——」

広子はあらゆる姉のように忠告の言葉を加えようとした。すると辰子はそれよりも先にこう話を截断せつだんした。

「とにかく大村を知らないじゃね。——じゃ姉さん、二三日中に大村に会つちや下さらない？ 大村も喜んでお目にかかると思うの。」

広子はこの話頭の変化に思わず大村の油画を眺めた。藤の花は苔こけばんだ木々の間になぜか前よりもほのぼのとしていた。彼女は一瞬間心の中に昔の「猿さる」を髻ぼうふつ髻しながら、曖あ昧まいに「そうねえ」を繰り返した。が、辰子は「そうねえ」くらいに満足する気色けしきも見せなかった。

「じゃ会つて下さるわね。大村の下宿へ行つて下さる？」

「だって下宿へも行かれないじゃないの？」

「じゃここへ来て貰もらいましょうか？ それも何なんだか可笑おかしいわね。」

「あの人は前にも来たことはあるの？」

「いいえ、まだ一度もないの。それだから何だか可笑しいのよ。じゃあと、——じゃこうして下さらない？ 大村は明後日表慶館あさつてひょうけいかんへ画を見に行くことになっているの。その時

刻に姉さんも表慶館へ行つて大村に会つちや下さらない？」

「そうねえ、わたしも明後日ならば、ちようどお墓参りをする次手もあるし。……」

広子はうつかりこう言つた後、たちまち軽率を後悔した。けれども辰子はその時にはもう別人かと思うくらい、顔中に喜びを漲らせていた。

「そうお？　じゃそうして頂戴。大村へはわたしから電話をかけて置くわ。」

広子は妹の顔を見るなり、いつか完全に妹の意志の凱歌を挙げていたことを発見した。

この発見は彼女の義務心よりも彼女の自尊心にこたえるものだった。彼女は最後にもう一度妹の喜びに乗じながら、彼等の秘密へ切りこもうとした。が、辰子はその途端に、――

姉の唇の動こうとした途端に突然体を伸べるが早いか、白粉を刷いた広子の頬へ音の高いキスを贈つた。広子は妹のキスを受けた記憶をほとんど持ち合せていなかった。もし一度でもあつたとすれば、それはまだ辰子の幼稚園へ通つていた時代のことだけだった。

彼女はこう言う妹のキスに驚きよりもむしろ羞しさを感じた。このシヨックは勿論浪のように彼女の落ち着きを打ち崩した。彼女は半ば微笑した目にわざと妹を睨めるほかはなかつた。

「いやよ。何をするの？」

「だってほんとうに嬉しいんですもの。」

辰子は円卓えんたくの上へのり出したまま、黄色い電燈の笠越しに浅黒い顔を赫かがやかせていた。

「けれども始めからそう思っていたのよ。姉さんはきつとわたしたちのためには何なんでもして下さるのに違いなんて。——実は昨日きのうも大村と一いちんち日姉さんの話をしたの。それでね、

……」

「それで？」

辰子はちよつと目の中に悪戯いたずらつ兇こらしい閃ひらめきを宿した。

「それでもうおしまいだわ。」

三

広子ひろこは化粧道具や何かを入れた銀細具ぎんさいくのバッグを下げたまま、何年なんねんにもほとんど来たことのない表慶館ひょうけいかんの廊下ろうかを歩いて行った。彼女の心は彼女自身の予期していたよりも静かだった。のみならず彼女はその落ち着きの底に多少の遊戯心ゆうぎしんを意識していた。数年前の彼女だったとすれば、それはあるいは後うしろめたい意識だったかも知れなかった。が、

今は後めたいよりもむしろ誇らしいくらいだった。彼女はいつか肥り出した彼女の肉体を感じながら、明るい廊下の突き当りにある螺旋状の階段を登って行った。

螺旋状の階段を登りつめた所は昼も薄暗い第一室だった。彼女はその薄暗い中に青貝を鏝めた古代の楽器や古代の屏風を発見した。が、肝腎の篤介の姿は生憎この部屋には見当らなかつた。広子はちよつと陳列棚の硝子に彼女の髮形を映して見た後、やはり格別急ぎもせずに隣の第二室へ足を向けた。

第二室は天井から明りを取つた、横よりも豎の長い部屋だった。そのまた長い部屋の両側を硝子越しに埋めているのは藤原とか鎌倉とか言うらしい、もの寂びた仏画ばかりだった。篤介は今日も制服の上に狐色になつたクレヴァア・ネットをひっかけ、この伽藍に似た部屋の中をぶらぶら一人歩いていた。広子は彼の姿を見た時、咄嗟に敵意の起るのを感じた。しかしそれは掛け値なしにほんの咄嗟の出来事だった。彼はもうその時にはまともにもこちらを眺めていた。広子は彼の顔や態度にたちまち昔の「猿」を感じた。同時にまた気安い軽蔑を感じた。彼はこちらを眺めたなり、礼をしたものかしないものか判断に迷っているらしかつた。その妙に落ち着かない容子は確かに恋愛だのロマンスだのと縁の遠いものに違いなかつた。広子は目だけ微笑しながら、こう言う妹の恋人の前へ

心もち足あし早はやに歩いて行つた。

「大村おおむらさんでいらつしやいますわね？ わたしは——御存知ごぞんじでございませう？」

篤介はただ「ええ」と答えた。彼女はこの「ええ」の中にはつきり彼の狼狽ろうばいを感じた。のみならずこの一瞬間に彼の段鼻だんばなだの、金齒きんばだの、左の揉もみ上げの剃刀かみそりきず傷だの、ズボンの膝ひざのたるんでいることだの、——そのほか一々数えるにも足らぬ無数の事実を発見した。しかし彼女の顔色は何も気づかぬように冴さえ冴ざえしていた。

「今日きょうは勝手なことをお願い申ましまして、さぞ御迷惑ごめいわくでございませう。そんな失礼なことをとは思つたんでございますが、何なんでもと妹いもうとが申すもんでございませうから。……」

広子はこう話しかけたまま、静かにあたりを眺めまわした。リノリウムの床ゆかには何なんもか、かのベンチも背中合せに並んでいた。けれどもそこに腰こしをかけるのは却かえつて人目ひとめに立ち兼ねなかつた。人目は？——彼等の前後には観覧人かんらんじんが三四人、今も普賢ふげんや文珠もんじゆの前にそつと立ち止まつたり歩いたりしていた。

「いろいろ伺うかがいたいこともあるんでございますけれども、——じゃぶらぶら歩きながら、お話しすることに致いたしましませうか？」

「ええ、どうでも。」

広子はしばらく無言のまま、ゆっくり草履ぞうりを運んで行った。この沈黙は確かに篤介には精神的拷問ごうもんに等しいらしかつた。彼は何か言おうとするようにちよつと一度咳せき払いをした。が、咳せき払いは天井の硝子ガラスにたちまち大きい反響を生じた。彼はその反響に恐れたのか、やはり何も言わずに歩きつづけた。広子はこう言う彼の苦痛に多少の憐憫れんぴんを感じていた。けれどもまた何の矛盾なんむじゆんもなしに多少の享樂をも感じていた。もっとも守衛しゆえいや觀覽人に時々一瞥いちべつを与えられるのは勿論彼女にも不快だつた。しかし彼等も年齢の上から、——と言うよりもさらに服装の上から決して二人の關係を誤解しないには違いなかつた。彼女はその氣安さの上から不安らしい篤介を見下みおろしていた。彼はあるいは彼女には敵であるかも知れなかつた。が、敵であるにしろ、世慣よなれぬ妹と五十歩百歩の敵であることは確かだつた。……

「伺伺いたいと申しますのは大したことではないんでございますけれどもね、——」
彼女は第二室を出ようとした時、ことさら彼へ目をやらずにやつと本文ほんもんへはいり出した。

「あれにも母親ひとりが一人ひとりございますし、あなたもまた、——あなたは御両親ともおありなんでしょうか？」

「いいえ、親父おやじだけです。」

「お父様とうさまだけ。御兄弟は確かございませんでしたね？」

「ええ、僕だけです。」

彼等は第二室を通り越した。第二室の外は円天井まるていの下に左右へ露台ろだいを開いた部屋だった。部屋も勿論円形をしていた。そのまた円形は廊下ろうかほどの幅をぐるりと周囲へ余したまま、白い大理石の欄干らんかん越しにずっと下の玄関を覗のぞかれるように出来上っていた。彼等は自然と大理石の欄干の外をまわりながら、篤介の家族や親戚や交友のことを話し合った。彼女は微笑を含んだまま、かなり尋ね悪い局きよくしよ所ところにも巧たくみに話を進めて行つた。しかしその割に彼女や辰子たつこの家庭の事情などには沈黙していた。それは必ずしも最初から相手を坊ぼつちゃんみくびと見縊みくびつた上の打算だざんではないのに違いなかつた。けれどもまた坊ぼつちゃんみくびと見縊みくびらなければ、彼女ももつとこちらの内輪うちわを窺うかがわせていたことは確かだった。

「じゃ余りお友だちはおありにならないんでございますね？」（未完）

（大正十四年四月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>